擬似愛の章

成平一平太

私は小説や童話を書くのを趣味にしている。いや趣味の域から脱したいと、もがいているのが本当のところである。

小学生の頃から作文が得意だった。小学校・中学校の頃には、市主催作文コンクールや文芸作品募集の催しには必ず応募し、いくつかの賞を貰ったこともある。特に血筋というわけではない。両親は、既に他界した祖父母が始めた魚屋を営んでおり、文学とは全く縁のない生活であった。

私は三人兄弟の一番末っ子として生まれた。待望の女児ではあったが、両親が商売をしていたこともあり、ほったらかしで育った。近所のおばさんたちは「手のかからない良い子ね」と言って誉めてくれたりもしたが、私だって両親に甘えたいといつも思っていた。だが望めることではなかった。結果として、幼い頃から一人で遊ぶ癖が自然に身に付いていた。

二人の兄は、田舎の高校をやっとの思いで卒業をし、今ではそれぞれに家庭を持ち子供もいる。長兄は卒業を半年後に控えて、両親に魚屋を継ぐと言っていたが、「いかに田舎といえども個人商店の時代ではない。魚屋は俺の代で仕舞いだ、自分の行く道を捜せ」と、父は兄を諭した。結局二人とも家を出て、平凡なサラリーマンとなった。その結果、私が店の手伝いを時々やらされる破目になった。

中学の時には既に、刺身用にと市場から仕入れたアジが売れ残れば、翌日には開きにして天日に乾し、頃合いになった時点で、干物として店先に並べるのが私専用の仕事となった。いつの間にか、アジだけに止まることなく、イカ・カマス・小サバと広がって行った。そんな時には、手の皮が剥けるほどに石鹸を泡立て洗面所に立っていた。男子に魚臭いと言われたくなかったからだ。中学生ともなれば私にだって恋心を抱く男子の一人や二人はいた。しかし告白するほどの勇気もなく、いつも遠くから眺めているだけだった。

私は兄たちと違って、隣町まで電車に乗って高校に通うことになった。親の経済力にも問題はあるが、大学受験をするほどの学力もなく端から就職組だった。だからといって、部活に汗を流すことなく、暇さえあれば単行本を読みふけっていた。これといって好きなジャンルや作家がいたわけでもなく何でも良かった。時には自分で小説や童話を書いても

いた。出版社が懸賞を付けて募集していると知るや、小説や童話を書いてはせっせと応募していたが、特に何かの成果を上げたということもなく現在に至っている。それでも私なりに高校生活を楽しんでいた。

最後の夏休みも終り、二学期に入ったある日、電車の中吊り広告に「女子高生の八十パーセントが卒業までには、キスの経験、五十パーセント以上の女子高生がセックスの経験があり」と書かれているのを見て、「どこの学校で取ったアンケート結果よ」と憤慨していた。学校でも生徒の間で、あの週刊誌の記事が話題になっていた。わざわざ週刊誌を買ってきた生徒もいるほどのショッキングな内容であった。

東京まで電車で一時間足らずのこの町ではあるが、信じられないほどの数字だと私は思っていた。少なくても私の学校ではゼロに近い数字だと信じている。いや信じたい、私が少数派とは思いたくもない。

昼休みに校舎の屋上に上がり、いつものように私は単行本を開けていた。

「恭子。恭子はどこまで経験したのよ」

突然、親友の高見智子が私に聞いてきた。智子とは三年のクラス替えで就職組と進学組とに別れはしたが一年・二年と同じクラスでとても気が合った。

通学電車は違っても、中吊り広告は同じ物が吊り下げられている。どこのクラスでも旬の話題は同じである。何の話なのかは直ぐに判った。

「どこって、私には全く関係のない話題よ。第一、相手がいないわよ」

智子が私に聞いてきた真意を計りかねていた。確かに私にだって思いを寄せる男子はいるが、打ち明けたこともなければ、ましてやデートなんて出来るとも思っていない。生徒の間で出回っている緊急連絡網で携帯電話の番号を知った程度であり、メールアドレスだって知らない。私がしていることといえば、せいぜい彼のことを思いながら恋愛小説を書くことぐらいであった。勿論、小説の中では彼に抱かれたことも一度や二度ではないが、実体験なんてとんでもない話しであった。

「何言ってんのよ。知ってるわよ。昨日、弓道部の岡谷君と楽しそうに歩いていたじゃない」

私が思いを寄せている相手が岡谷信人であることは親友の智子には打ち明けてもいたし、確かに昨日、彼と歩いてもいた。心踊る思いがしたことも事実ではあったが、私の周りで起きる様々な事柄がバラ色とは限らない。現実はもっと残酷なことが多いことだってある。現に昨日のことは智子には言えないでいるし、言うつもりもない。「彼が私と歩いていた

のは、智子、彼があなたのメールアドレスを私から聞き出したかったからよ。勿論、教えてなどいないわよ。絶対に教えるものですか」私は心の中で憤慨しながら呟いた。

それから一週間ほどして、智子と岡谷君が校舎の裏でキスをしていたとの噂が流れた。私は事の真意を確かめることもなく、智子とは疎遠になった。

学校を卒業すると同時に、八王子市にある小さな商社に私は就職をした。六畳ほどの洋間と、バスとトイレがセットされたシステムバス、申し訳ない程度に作られたキッチン、古いワンルームタイプのアパートではあったが、快適な一人暮しが始まった。生まれて始めての私の城だった。私は、時間を見つけては誰に遠慮することなく、パソコンを前に童話や小説をだらだらと綴っていた。

十年ほどしてクラス会の案内状が届き、九月の最終日曜日に恩師を交えて開催するとあった。懐かしさもあって出席をした。クラスの半分ほどが顔を揃えた。

幹事の田中祐介の乾杯の音頭でクラス会が始まり、久し振りの再会を祝ってグラスを交わしながら、大きな笑い声が二十畳ほどの部屋に幾度も広がった。私は、智子も岡谷君もクラスが違うため、今日の会には出席しないことは判っていたが、その後の動向が知りたくて、昔から情報屋として名高かった紀美子に、それとなく探りを入れるチャンスを伺っていた。相変わらず紀美子は、誰それかまわず酌をする振りをしながら、出席者の近況を聞き回っていた。やっと私の前にビール瓶を持ってやって来た。

「恭子久し振りね。元気にしてる。ビール飲んでるの？お酌するわ」

既に、紀美子は少し酔っていた。私は、コップにつぎ足されたビールを一気に飲み干した。

「やるじゃない」

紀美子は身を乗り出しながら、もう一度私に酌をしたいと言ってきた。私はそれを受けながら、チャンス到来とばかりに、智子と岡谷君のその後の動向を聞いた。

「恭子、あんた智子と親友だったのに知らないの？」

私はドキッとした。智子とは学校を挟んで、向こう側とこちら側とに隣接した町からそれぞれ電車通学だったこともあり、岡谷君とのことで疎遠になって以来、クラスの違う智子とは会う機会が無くなっていた。敢えて避けていたと言った方が正しいのかもしれない。

「卒業式間近になって、智子のお腹に赤ちゃんが出来ていることが判り、合格した大学に入学することなく、卒業と同時に二人で駆け落ちしたのよ。もっともこのことを知ってい

る人は極僅かね。学校側もひた隠しにしてたからね」

紀美子は「取って置きの情報よ」とばかり得意気になっていた。私は早くその先が聞きたくて固唾を飲み「それでどうなった？」と、目で合図を送った。

「一箇月もしない内に智子の両親に見つかり、引き戻されて中絶したわよ」

紀美子は、「呆気ない幕引きだったわよ」と言わんばかりに愛想の無い言い方をし、話しを続けた。

「二カ月ほどして智子は交通事故で死んだわ。自殺だったのかも。真相は藪の中よ」

隣で聞き耳を立てていた順子は、「智子、可哀相だったわね」と小さく呟き、頬をつたう涙をコップを持った手の甲で拭きながらビールを飲み干した。

私が通っていた高校は隣町であったことと、智子の交通事故の新聞記事は地方版の小さな記事であったことから、私の両親も気づくことなく、結果として私の耳に届くことはなかった。

「紀美子、岡谷君のその後は知っている？」

智子とは小学校・中学校と同窓だった順子は、智子に同情的だった。岡谷信人の薄情さに憤慨していた順子は、「あんたは今でも情報屋でしょ」と、言わんばかりにその後を紀美子に聞きたがった。

「岡谷は、智子が死んで直ぐにM市に引っ越したわ。親が大学の入学金やら何やらを払って、休学扱いにしていたおかげで入学式から半年ほど経って復学し、無事卒業。今では一児のパパよ」

紀美子は順子の問い掛けに「智子のことはさっさと忘れて別の女と結婚をして、子供を作るような薄情者よ、岡谷信人と言う男は」と、呂律の回らない舌で付け加えた。それだけ聞くと順子は紀美子に新しいコップを持たせビールを注ぎ、「また、後でね」と、言ってビール瓶を片手に席を立った。

「ねえ、恭子。彼氏いるの？」

「いないわよ。そんなの」

「まさかバージンってことないよね？」

「・・・・・」

「どうなのよ．いつだったか、週刊誌に女子高生の半分以上が卒業迄に、セックスの経験者だって記事、覚えている？学校中のクラスで話題になった」

「そんなことあったけ？」

キスの経験も無かった奥手の私は、少数派だったことを決めつけられるのが嫌で惚けて見せた。酔いが回っているからか、紀美子は絡みつくように話しを続けた。

「惚けないで。恭子はそういうことは忘れない人よ。何でも小説のネタになるからって気付かれないようにメモる癖があること知ってるわよ。恭子、小説家になりたいんでしょ」

私は、私の全てが見透かされた気がした。

「あの記事が出た後、何人かで我が校の三年生の実態調査をしたのよ。恭子知らないでしょ。調査が終るまでに半年近く掛かったわ。勿論、情報は常に更新してたわよ。だから半年も掛かったのよ。結局、卒業式までに纏めることは出来なかったけどね。智子は経験済に〇を付けたわ」

「それで、どうだった？何人が経験者だったの？」

いつの間にか私は、紀美子の話しに引きずり込まれていた。勿論、後でメモに残そうとも考えていた。

「週刊誌ほどではなかったわ。それでもキスの経験者は六十パーセントを超えていたわ。奥手の恭子には信じられないかもしれないけれど、女子は卒業するまでに十人に三人はセックスの経験ありだったわ。男子は三人弱だったけど」

「うっそう。でもどうして女子の方が多いの？」

私は、経験者の多さに驚くとともに、どうして同じ人数でないのか不思議だった。その先を知りたいと紀美子の顔を見つめながら次の言葉が発せられるのを待った。

「女子が遊ばれたってことよ。恭子、気を付けなさいよ。あなたみたいな奥手の子は騙されやすいのよ。特にあいつは女の敵よ」

紀美子は、恩師のグラスにビールを注ぎながら調子良く話しを合わしている森本謙治を指差した。身長も高くルックスも申し分のない、野球部のピッチャーだった森本謙治は、必然的に女子生徒の人気も高く、男女のそうした話しに疎い私にも色々と耳にすることはあった。それにしても「騙され易い」の一言は私の心の奥深くにまで突き刺さる言葉だった。

「今日のクラス会に来ている人は男子も女子も皆、卒業式前にはキスかセックスの経験をした者ばかりよ、もっとも恭子と私を除いてね」

紀美子は自身にも〇を付けたかったが、情報屋としての名声が男子から敬遠される要因だったと付け加えた。私は意外だった。学生の頃から誰とでも気楽に話しをすることが出来た紀美子も少数派の仲間だった。

タクシーで帰るほど金に余裕の無い私は、二次会に参加することなく電車に乗った。帰り際に紀美子に言われた「悪い男に引っ掛からないように本当に気を付けなさいよ」が耳に残り、悔しさが胸の奥に増してくるのが判った。

私にとって初めての経験は正に騙されたものであった。

今年の暮れには二十代との別れが来ようとしている私は、私を騙した岡田純也とのことを想い出しながら、パソコンのキーボードを叩いている。秋の懸賞小説に応募するために悲恋小説に仕立てているのだ。締め切りを来週に控え、応募規定の原稿用紙三百枚迄に二十枚ほどを残し、ラストシーンを如何にすべきか悩みながら、母が送ってくれたアジの干物をコンロで炙り、コップ酒を手にしている。

書き溜めた幾つかを、世に出したいと手立てを考えていた時に、私が書いた小説や童話に理解を示し、同じ価値観を共有してくれた岡田純也に、私は私の全てを曝け出し、いつしか一つ屋根の下で生活を共にすることを夢見ていた。

岡田純也に巡り逢う前の私は、仕事の合間を見つけては、何処かに出掛けるでもなく、寂しげなアパートに一人籠もり、いつかは世に出たいと必死だった。懸賞小説にも片端から応募をしていたが、ことごとく無しの礫であった。本当に審査員の目に触れているのであろうか、前選考で訳の判らないスタッフが、仕分けの際に紛失させたのではないか、いやいやその前に配達を嫌がって郵便配達員が棄てたのではないか、ほらよく年賀状事件が毎年発生しているではないか。私は落選の理由を他に求めていた。

思い余っているうちに新聞広告に自費出版の記事を見つけた。きっと出版すれば多くの読み手の目に止まるであろう。ミリオンセラーとはいかないまでも、マスコミに取り上げられるぐらいは売れるのではないか？

それほどにわたしの書いた小説は、読者の心を打ち、心酔するに至るほどの力作であるとの自負があった。この誤った過剰な迄の自信が、冷静な判断をするに必要な感覚を鈍らせた。

一冊の本を作り上げる為のコスト、一冊千二百円の単価設定ではあっても、最初の刷り上げまでに掛かる費用は、僅か三百冊あまりにおいて業者の経費と利益が上乗せとなり、その四倍もの費用請求が来た。発行部数が多ければ多いほど一冊当たりの単価は低くはなることは判ってはいるが、私にはそんな財力は毛頭無い。

私の作品を出版するにあたっては、両親も兄弟も「自分の力でやる分にはいい」と理解

を示してはいるが、その理解の言葉尻には冷たいものを感じさせている。考えて見れば同じＤＮＡなのだから所詮底の知れた筆力、文才と見抜いているのである。それでも必死に貯めこんだ泣けなしの貯金を叩いて本にした。

私は出版社が指定した書店に電車に乗って出掛けた。店頭に積まれている筈の私の力作を探したが何故か見当たらない。

「すみません。Ｓ出版社の新刊本は何処にありますか？」

「Ｓ出版社？・・ああ、自費出版ね。自費出版関係は、その棚の一番奥だったかな」

そう言いながら店員は私を奥の棚まで案内をしてくれた。私は店員に軽く頭を下げ、隅の隅に『その他大勢』と言わんばかりの扱いがされている棚ではあったが私の力作を探した。ようやく一冊を見つけたが、何冊もかき分けなければならないほどの置かれようであった。

何カ月間か店内に置かれ『どうせ返品すれば義理の立つ書物』として扱われているのが一目瞭然である。考えてみれば僅か三百冊の新刊を全国の協力書店に配本するには一店舗当たり精々二冊か三冊である。ましてや無名の素人作家の新刊が読者の目に付く所に置かれる訳がない。私が店長であっても同じ扱いをするであろう。電車賃を使ってまで心踊らせ向かった書店、わざわざそんな所まで行かなくても私の住んでいる街にも大きな書店が存在している。隣街にもその隣街にも、何軒いや何十軒もの大きな書店は営業している。そうした書店を飛び越え電車賃を払い、宝探しの如く目を凝らし、掻き分けなければ私の本は手に入らないのだ。

出版社の担当者に、私が味わった思いの丈をぶっつけてみたが、全国の書店数と出版数を理論的に語られれば返す言葉も無い。書店に行けば店頭にうずたかく積まれている光景は、私が勝手に思い込んだ幻にしか過ぎないことは明らかであった。

担当者は、返す言葉でインターネット販売に乗せれば間違いなく、全国の読者の目に触れることが出来ると言って来た。私は掲載料として幾らかを更に支払った。

三週間ほどが過ぎ、自室のパソコンを開き、早速に検索してみると私の力作が紹介されていた。出版社との打ち合わせを重ね、練りに練った幻想的な蒔絵に「錦織の恋」とタイトルされた表紙に、私のペンネームが刷り込まれ紹介されていた。私の書いた小説の他に、同じ思いにて掲載された力作が五編ほど紹介されていた。画面を送って行くとそこには、何十冊もの力作が作者の思いを重ね続いていた。

一週間ほどが過ぎると五冊の注文が入ったと出版社から連絡が来た。私は初めて私の作

品が、全く知らない人の目に触れたことへの喜びと、金に変わったことへの喜びを感じると共に、半年もすれば増刷の話しに繋がるかもしれないと勝手に思い込み、顔の筋肉が緩んだ。

しかし最初の五冊以外においては全く音沙汰がなかった。今にして思えば、インターネットで表紙とタイトルと作者と単価しか紹介されていない無名の素人作家の書物が、読者の購買意欲をそそるだろうか？何がどのように文字となっているのかが全く判らない書物、連想さえするにも困難な書物なのだから、最初の五冊はさくら購買だった可能性が高いと、悟るまでに一年もの時間を費やした。

振り帰れば私も今年で三十才になる。家族は私の結婚などとっくに諦めている。それでも生きて行くために必死で働き、時間を見つけては小説を書いている。いつかはきっととの思いで・・・。

私の友達の多くは結婚をし、子供を生み、幸せな家庭を築いている。中には離婚の憂き目にあっている友達もいるが、一応は世間で言うところの女の幸せを目指した経験をしている。私にだってもう一度、恋をしたいと思う気持ちもないではないが、私は騙され棄てられ、男を信じられなくなっている。私の担当編集者だったS出版社の岡田純也が、捨て猫のような惨めな思いを私に味合わせた男だった。

世間で言うところの美人ではないかも知れないが、絶対に私はブスではない。目だって二重瞼だし、鼻の穴は多少上向いているかも知れないが、団子鼻でもなくチャームポイントの一つに上げても良いくらいの自信はある。貧しい食生活が功を奏しているとはいえ、スタイルだってまあまあだと思っている。年と共に出始めた下腹の膨らみは、裸にならない限り絶対に外見では判らない。難があるとすれば、ふくら脛の筋肉がシシャモの腹の様に膨らんでいることくらいだ。高校生の時にはこの筋肉が役立っていた。運動部員でもないのに、体育祭の短距離競走には必ずクラスの代表として選ばれていた。

私はいとも簡単に恋に落ちた。私の書いた小説を力作と褒めたたえ、感性豊かな女性と岡田純也は持ち上げてくれた。今にして思えば歯の浮くような世辞ではあったが、私は彼の言葉に酔い、多くの時間を必要とすることなく恋心へと変わっていった。

彼と一つ屋根の下で暮らせる日を夢に見て、パソコンのキーボードを叩く時間も惜しみ、彼のアパートを訪ね、掃除をしたり夕飯を作ったり朝食を共にしたりと、それなりに楽しい時間を過ごしたこともあった。しかし、そのどれもが彼流のセールストークの中に疑似愛の章があったに過ぎないと一年かけて知ったのである。

私には初めての男であった。岡田純也にしてみれば、愛を語ることで営業実績を上げることが出来、性的欲求も満たさせてくれる、都合の良い女でしかなかったのかもしれない。そうとは知らない私は、私が書いた小説や童話を心から理解してくれる彼と幾度となく愛し合い、充実した日々を送っていた。いや、そう思い込まされていた。

私が書いた小説が本となり、インターネットに掲載された時点で、私は岡田純也にとって客ではなくなっていた。セールストークとして疑似愛の章の必要もなくなったのだ。よほどのお人好しでもない限り同じ過ちを繰り返すことはないからだ。

岡田純也と初めて会ってからの三カ月余りは、全ての事柄が彼の身体を通すことによって浄化され、間接照明の如く、暖かく柔らかい灯のみが私の身体に染み、安らぎの毎日だった。それが今では、私はアパートの合鍵を取り上げられ、惨めな捨て猫と化していた。

始めて私の本が売れたとの連絡を最後に、奴からは何の音沙汰も無くなった。不安に駆られた私は、二週間ほどして彼のアパートを訪ねた。

「私、恭子」

台所の格子窓を透して灯が見え、部屋の中に居ることは判っていた。合鍵を使ってドアを開けることも出来たが何故か勇気がなかった。私はノックをしながらドア越しに声をかけた。私が来たことが判らない筈はない。諦めかけた時にドアノブが中から回された。

「悪いね。君とはもう終りにしたいんだ」

ドアを開けるなり奴は無表情で言い放った。私には何が何だか判らなかった。真っ暗闇の穴の中に突き落とされ出口を求め一人さまよい、顔中に蜘蛛の巣が絡みついた時のような嫌悪感に一瞬にして包まれた。呆然としている私に追い打ちが掛かった。

「この部屋の合鍵を返してくれ。君にはもう此処へは来て欲しくないんだ」

小さな商社とはいえ安定した収入が得られる会社に辞表を出し、私は、古いワンルームのアパートの一室に閉じこもった。夢見た愛が、幻であった現実から立ち直るのに一箇月近くを費やした。貯えも底を突きかけていた。生きて行くためには働かねばと、萎えた心を奮い立たそうとしていた矢先に、かつての上司から「後釜が見つからないので戻ってくれないか」と、私の携帯に連絡が入った。私には長いトンネルの向こうの出口の明かりが見えた思いだった。自暴自棄になりかけていた私は、鏡の前に立ち、自分の姿を見つめ直し、明日の出社に備え美容院の予約を入れた。私の心は立ち直り、岡田純也と出合う前の私に戻っていたかに見えた。

翌日からの私は、前よりも忙しく仕事をこなし、仕事が終れば出来る限りの時間を小説を書くことに費やしていた。私と岡田純也とのことは、過ぎたことと心の隅の奥の奥に追いやり、鍵をかけ、仕舞い込んだ。

二度と鍵を開けることのない様にと、自費出版をした私の作品以外、彼へと繋がる全てを処分して一年が経った。処分出来ていた筈であったが、忙しさの中にも時には、堪えきれないほどに苛立つ日が三カ月に一度の割合で訪れていた。私はその都度、幾ばくかの金をＡＴＭで下ろし、電車に飛び乗り東京へと向かう。

原宿のメイン通りから一本外れた道筋にあるゲームコーナーに入り、ＵＦＯキャッチャーを操り、ぬいぐるみのゲットを目指すのだ。別にぬいぐるみが欲しいわけではない。本当に欲しいのは男であった。それも一時を満たしてくれる男を求めてこのゲームコーナーに通っている。岡田純也のことは忘れられても、女の性が忘れきれないでいるのだ。新しい恋を見つければと思わないでもない。

私を引き戻してくれた五歳年上の上司は、結婚してまもなく妻を病気で亡くしている。入社間もない頃ではあったが私も葬儀に参列をした。暫くは落ち込んでいる様子が痛ましいと思えた時期もあったが、ここ最近に至っては仕事に打ち込む後ろ姿が輝いて見える時がある。私にも何かに付けてアドバイスをくれる。プライベートな食事を共にしたこともある。そんな上司に男を感じない訳でもないが、一途に男を信ずることが出来なくなっていた。それほどに私にとって岡田純也は大きな存在であった。

自分でも嫌になるほど、おぞましい行為であることは充分に承知している。快楽を得るためだけの男漁りをしている姿など、父や母には絶対に知られてはいけない親不孝な行為だと思ってはいるが、どうにも抑えが利かないのだ。

この暮れには今年始めての里帰りをしようと考えている。思い立てばいつでも帰ることの出来る距離にも関わらず、一向に顔を見せない娘を心配して色々と言ってくるのだ。三十にもなろうとしている女が、男も知らないとは親も思ってはいないであろうが、ゲームコーナーで一人ゲームに興じている振りをしながら男を物色しているなどとは、微塵にも考えていないことは明らかである。本来は親の顔をまともに見られないほどの汚れた一面であり、絶対に悟られないようにしなければと考えている。

秋の懸賞小説の締め切りを間近に控え、私の苛立ちは頂点に達していた。何もかもを放り出しＡＴＭに走った。男へのチップを必要とする時があるからだ。

その日の最終電車でアパートに帰りベッドに潜り込んだ。別に心が満たされた訳ではな

いが苛立ちは治まっていた。これからも私は変わってしまった私の性を引きずって生きていかなければならない。見も知らぬ男とのその場限りの絡み合い。心の通い合いもなければ理性のかけらもない行為。せめてもの救いは行為の代償を得ていないことだけである。

「私は娼婦ではない」そう呟いて目を閉じた。

その晩、私は岡田純也の夢を見た。心の奥の奥に鍵まで掛けた筈ではあったが、せめてもの復讐にと、小説の『ねた』にして、悪者に仕立て上げてやろうと書き始めた小説が、応募規定までに枚数が至っていない。どうしてもラストシーンが纏まらないのだ。それなのに、夢の中では、何故か私の小説が書き上がっていた。それも復讐のために書き始めた小説なのに岡田純也とのハッピーエンドで終っている。あいつが微笑んでいるのだ。おまけに特賞候補と書かれた箱にもう一つの作品と共に入れられている。

特賞に選ばれるということは、私の作品が製本され、全国至る所の書店の特等席に帯び付きで並べられることになる。長年の夢が叶い、天まで昇るほどの気持ちでなければならないのに、何故か私は浮かない顔をしていた。ハッピーエンドのラストシーンが気に入らないのだ。岡田純也への復讐の意味を込めて書き始めた小説が、ハッピーエンドで終って良い筈がない。私は密かに出版社に忍び込み、ラストシーンを書き換えた。私と同じように『疑似愛の章』に騙された女性と協力して、離れ小島の地下牢に鎖の先に大きな鉄の玉を繋げ閉じ込めたことにした。

結果として選には洩れたが、そんなことは気にしない。私の足元に縋り付き、助けを求めて詫びる岡田純也の頬に、薄ら笑いを浮かべながら私がビンタを食らわしたところで目が覚めた。

パジャマを着替え顔を洗うと、私はいつものようにトースターに食パンを二枚入れ、マグカップに注いだ牛乳にスプーン一杯の砂糖を入れて電子レンジのスイッチを押した。洗面台の鏡に自分を写し、髪にブラシを入れ、薄くファンデーションを伸ばし、トースターの知らせを待った。

私の化粧時間はこんなもんだ。毎朝三十分以上も化粧に時間を使っている女の気が知れないと私は思っている。女が一生の内で出掛けに化粧を必要とするのは十八歳から七十歳と限定しても優に五十年以上である。ざっと九千時間は化粧をしていることになる。いったい何本の小説が書けるであろう。

朝刊に目を通しながらのトーストとホットミルク、これが私の朝の日課である。毎朝、

新聞に目を通すことによって映像で知る世間の出来事よりは遥かに情報の裏側を探ることが出来、小説を書くに当たって多くのヒントを得ることが出来る。

今朝の三面記事に五十八歳の婦人が刺殺され、隣町の男が逮捕されたとあった。どうやら愛憎の縺れらしい。私は、この事件についてより多くのことを知りたいとテレビ番組欄をチェックし、予約録画にセットしてから仕事に向かった。

よほどのことがない限り一時間ほどの残業で帰ることが出来る。いつものように夕方の七時にはアパートに帰った。洋服を部屋着に着替え、冷蔵庫から凍った握り飯を二個取り出し電子レンジに入れた。

一人暮しを始めた頃から三合ほどの米を焚き、何も味を付けずに握り飯にして冷凍保管をしていた。煮物も揚げ物も休みの日に多めに調理し、密封容器に小分けして冷凍庫に入れ、必要に応じて解凍しては一人食卓を楽しんでいた。少なくても一週間は、毎日違う食材を夕飯の友として食すことの出来るほどのレパトリーが冷凍されていた。こうすることによって時間も食材も有効に使うことが出来た。

毎日が自炊でしかも十分ほどで、そこそこの物を食することが出来るこのシステムは私の自慢でもあった。冷凍出来る私の手料理の内、おからに鶏肉や人参・椎茸を小さく刻み、焦げないように鍋の中を返しながら味付けをするのを最も得意としていた。

私は、食事をしながらノートパソコンを開き、締め切り間近の懸賞小説に応募するため苦闘していた。未だに決めかねているラストシーンを残し、頭から読み返していた。

主人公は私である。憎き相手は岡田純也だ。私は一矢報いるつもりでこの小説を書き始めた。だからといって惨めな終りかたはしたくない。

白紙の画面を埋めるのに考え込みながら、今朝のニュースを思い起していた。初老間近の婦人が愛憎のもつれで刺殺された事件、詳細に付いては取り調べ中とのことではあったが、どうやら犯人と思われる男はこの婦人に相当貢いでいたらしい。おそらくは疑似愛の章の成りの果ての結果と思われる。

愛を信じて貢いだ挙げ句に騙されていたと知り、憎さ百倍の結果であろうが、こんな下手なやり方では何の満足も得られない。私は嫌だ。どうして私が刑務所に入らなければいけないのだ。これでは仕返しにも仇討ちにもならない。私のこれからの人生は終ってしまう。

如何に小説の中とはいえ主人公の私が惨め過ぎてしまう。懸賞小説の締め切り迄には、まだ数日残っている。最終締め切りに対し、郵便局の消印日付が有効とあった。私は慌て

ることなく、ギリギリのところまでラストシーンを決めないで練ることにした。

翌朝、駅の売店で今日発売のS週刊誌を買った。案の定、あの事件の詳細がルポされていた。

被害者の婦人は独り暮しだったとある。離婚歴があり子供も二人いたとあるが、別れた旦那が引き取って育てたようだ。離婚の原因はこの被害者の男癖の悪さと借金となっていた。週刊誌に載っている被害者の顔写真はつい最近の物とあるが、年の割には若く見え美人顔である。

一方、加害者が刑事に両脇を固められ、車に乗り込む際の顔立ちは悲愴感に満ちたものであり、色男というには程遠いものがあった。年齢が五十四歳とあるので被害者よりも四歳下と言うことになるが、写真を見る限りは被害者の方がどう見ても若い。

記事によると、この加害者は、母子家庭で育ち姉が嫁いだ後、母親との二人暮しが長く続き、母親が脳梗塞で倒れ寝たきりになったとある。三年前に亡くなるまで十五年以上も世話を続け、近所からも評判の孝行息子とのことだ。結果として婚期を逃し、この男にとっては被害者が始めての女性だったのかもしれない。病に倒れた母親を抱え、異性には縁の無い人生を送っていた加害者。女の扱い方など知る由も無いこの男は、優しく言い寄ってくる美人顔の女に言われるままに金を渡し、洋服を買い与え、共に生活することを夢見ていたに違いない。

これまでにもこの女は、自身の顔立ちと口のうまさを武器に幾人もの男を渡り歩いて来たに違いない。この女に取ってこれほどに扱いやすい男はなかったであろう。女を知らない男には、多少張りの無くなった身体であっても、充分に男の欲求を満たしてくれるものであったに違いない。またこの女であれば男を悦ばす術は心得ていたであろう。

加害者が持っている全てを引き出す手段としてこの女は、疑似愛の章を身に付けていたに違いない。女から発せられる甘い言葉の裏を見極める力も経験も持たない加害者は、言われるままに全てを貢ぎ、女を繋ぎ止めるためにサラ金にまで手を出し、行き詰まった挙げ句の犯行であった。無理心中の意気込みで女を刺殺したものの、自分の身体に包丁を立てる勇気も無く、その場を逃げ出しはしたが、逃げ回るほどの余力も残ってはいなかったのであろう。町をさ迷っていたところを逮捕されたとあった。

私は、この記事を読んで加害者の男を哀れんだ。この男の中に私自身を見たような気がした。私は決めた。岡田純也を殺すことにした。私が逮捕されることなく岡田純也を殺す

案を練ることにした。

翌日の私は、仕事が手に付かなかった。如何にして完全犯罪をなし遂げるかで頭が一杯であった。私を引き戻してくれた上司が心配そうに気づかってくれた。殺害方法を考えているとも言えず、気分が優れないことにして早退をした。

アパートに帰るや否や、数少ない推理小説を書庫から取り出し、飛ばし読みを始めた。推理小説から学んだことは、岡田純也の死体が絶対に発見されないことが一つ上げられるが、女の私には死体を持ち運ぶことも、掘り起こされることの絶対ないほどに地中深く埋める力などある筈もない。ましてや如何に小説の中とはいえ、ドラム缶に死体を入れて、コンクリート詰めにして海に棄てるなど全くもって無理である。従って私は、絶対的なアリバイを如何にして作り出すかを考えると同時に、私が直接手を下すことなく始末する手立てはないかと考えた。

あわよくば殺人と悟られることなく成就出来ればいうことはない。いっそ藁人形に五寸釘。いやいやそんな不確かな方法で目的が達成される筈もない。私と同じ動機を持つ女は間違いなく何人もいる筈である。きっと刑事は私の所にも来るに違いない。殺害の方法に付いては、アリバイの構想次第ということである。

汚れを知らなかったこの私の身体をあんな奴に任せ、これが女の幸せなのだと勘違いをさせられ、悔しい思いではあるが、岡田純也の行動パターンや弱点をベッドを共にしたことで知ることが出来た。今となってはこれが唯一の成果だったのかもしれない。また、どういう訳だか奴の愛車の合鍵が処分されることなく残っていたのが、正にこの計画へと導いた。

翌朝私は、新横浜から新幹線に乗って名古屋に向かった。インターネットで調べておいた爬虫類専門のペットショップに入るや、大きめの青大将を一匹買い求めた。青大将を手に入れるのに、わざわざ新幹線代まで使い、仕事を休んでまで名古屋に来るには理由があった。私が仕掛ける凶器は、岡田純也を仕留めるには不確かかもしれないが、死に直結する事故を誘発させるには充分な効果が期待出来る。法律用語で言うところの未必の故意である。凶器から足が付くなど刑事ドラマでもよくあることだ。万が一のことを考えると関東一円で買い求めれば、私にたどり着く恐れがあると考えた故である。

「お待ちとうさん。お姉さん、これサービスや、何故か昨日から青大将が良く売れる。これで二匹目や、それも決まって女の人が買って行く」

店員は、青大将を飼いたいと女が一人でペットショップを訪れることに疑念を抱くこともなく商売繁盛を喜び、満面の笑顔で凍った二十日ネズミ一箱を紙袋に入れた。それとは別に持ち運ぶのに支障のないようにと、青大将を布袋に入れてから紙の箱に入れてくれた。店員に地下鉄に乗るからと有り合せの手提げ袋を貰い、不信がられないように気を使いながらも足早に店を出た。駅の売店でガムテープを買い求め、トイレで青大将の入った箱をグルグル巻きにし、万全を期して新幹線に乗り、夕方にはアパートへと戻った。

岡田純也への復讐の為にと度胸を決めての好きでもない青大将ではあるが、この大切な凶器には二日は生きていて貰わねばならない。早速にインターネットで蛇の飼いかたについて検索をした。二日に一度の割合でネズミを一匹食べさせれば良いとあった。

ペットショップでサービスにと貰った冷凍ネズミはドライアイスの甲斐もなくすっかり解けていた。私は勇気を振り絞り一匹だけを取り出し、ビニール袋に入れ新聞紙でくるんでから冷蔵庫に入れた。残りのネズミはスーパーの買い物袋に入れてその日の内にゴミに出した。翌朝には収集されることになる。

買い求めた青大将を袋から出す勇気は、今はまだ無い。しかし箱の中に入れ、ガムテープを巻いたままでは窒息死するかもしれないという懸念がある。私はガムテープを巻いたままの箱に小さな穴を幾つも開け、聞き耳を当てた。特に音がするわけではなかったが生きている気配は感じ取れた。この凶器を使って事を成就させるには、餌を与える時とこの凶器を仕掛ける時の二回、私は未だかって無い程の勇気を振り絞らなければならないことを思うと身震いがした。

翌朝、私はいつものように出勤をした。仕事をしながらも明日の決行に備え、失敗のないよう頭の中で何度もシミュレーションを繰り返していた。

仕事を終えると真っ直ぐにアパートに帰り、青大将に餌のネズミを与えるため、箱のガムテープを剥がした。青大将を入れた布袋を左手でぶら下げ、右手の人指し指で布袋の底を突っついてみた。生きていることを確認するつもりの行為ではあったが、突っつかれた方の蛇は、狭くて薄暗い袋の中での精一杯の抵抗とばかりに大きく動いた。私は驚いた拍子に思わず布袋のまま大きく放り投げてしまった。

床に落ちた布袋の固まりを私は心配げに少し離れて見守った。幸いにして死んではいないようだ。出口を求めて布袋の中でいつまでも蠢(うごめ)いていた。私は勇気を振り絞って、布袋を持ち上げ、青大将が布袋の底に落ちるのを確かめると布袋の外から袋を手繰り中程を紐で縛り付けた。私は冷蔵庫から新聞紙でくるまれたネズミを取り出した。気分の良い物で

はないが、餌としてのネズミは動くこともなく扱いは楽であった。布袋の入り口の紐を解き、すっかり解けたネズミを一匹入れ紐を結び直し、中程で縛り付けた紐を解くとネズミは袋の底へと落ちた。

私には、布袋の中を透して見る能力は無いが、名古屋まで新幹線に乗ってペットショップの扉を開けてから既に四十時間以上は経っている。餌のネズミを青大将は美味そうに呑み込んでいるに違いないと思えた。布袋の中の蠢きが治まるのを確かめ、私は満腹感にひたっているであろう青大将を箱に入れた。万が一にも逃げ出すことのないように、ガムテープを巻き、下駄箱の上に置いてキッチンへと移った。今日のディナーは買い置きのカップラーメンで済ませ、首尾よく岡田純也を葬ることが出来れば明日の夜は百グラム千円はするステーキとビールでお祝いをすることにした。

私は、カップラーメンに熱湯を注ぎ、プリンター用紙と鉛筆を用意し、明日の決行に先立ち失敗のないようもう一度確認することにした。

明日の第三土曜日は、浜松オートレースが開催される。岡田純也は特に賭け事が好きなわけではないが何故か、オートレースの爆音とレーサーの膝が地面すれすれになるほどにバイクと身体を倒し、コーナーを曲がって行くスリル溢れる展開に、興奮しているようだった。私も一度だけ一緒に付き合ったことがあったが、私の存在など無いかのようにオートレースに夢中になっているため、退屈な私はそれ以来、浜松に付いて行くことはなかった。

オートレースを見るために岡田純也は、東名高速道路富士川サービスエリアで必ず休憩を取っていた。浜松までの中間地点になるからだ。時間も決まって十一時に到着していた。岡田純也にとってオートレースが最も面白いのはその日の後半のレースだと知っているからだ。

私が最後に、岡田純也のアパートを訪れた日の屈辱は、今も忘れることは出来ないでいる。部屋の中にも入れてもらえず、玄関先で合鍵を取られ、押し出すような扱いと、冷たく扉の閉まる音が耳に残っているのだ。しかし、岡田純也は車の合鍵までには思いが至らなかった。私は今でも奴の車の合鍵を持っているのだ。だからこそ、今度の計画を思いつくことが出来た。それに、奴の弱点は蛇が大の苦手なことである。もっとも、蛇が好きだなどと言う人間は私もまだ会ったことはないが、岡田純也ほど異常な反応を示す人間にも会ったことはなかった。江ノ島へ海水浴に出掛けた際に、砂浜に落ちていたロープの切れ端を蛇と見間違え悲鳴を上げて飛び上がり、他の海水浴客の失笑を買ったことがあった。

今でもその光景を思い浮かべると、私は声を出して笑いたい程の衝動に駆られる。

私の計画はこうだ。富士川サーンビスエリヤで岡田純也の車を待ち受け、奴が来たら合鍵で車を開けてダッシュボードの中に青大将を放し、蓋をする。岡田純也は富士川サービスエリアを出ると浜松まで休憩することは絶対にない。オートレースを見るために車を走らせているので、スピードもいつもよりは出すに違いない。私は東名高速道路を清水インターで下り、公衆電話から奴の携帯に電話をし、ダッシュボードを開けるように仕向ければいい。公衆電話の表示が携帯に映し出されるが仕事上、疑うことなく電話に出る筈である。悲鳴が聞こえたら後は運を天に任せれば良いだけだ。きっと天は私に味方してくれるに違いない。純真な乙女の気持ちを『疑似愛の章』でその気にさせ、挙げ句の果てに女の性を芽生えさせられた私は、見も知らない男を相手に自身を満たさなければならない破目に陥ってしまったのだ。きっと疑似愛の章の犠牲になった女は私一人だけとは思えない。

興奮して寝つけなかった夜も明けた。私は三島駅前でレンタカーを借り、富士川サービスエリアで岡田克也の来るのを待った。やはり思った通りである。十一時十分前に奴の車が入って来た。もしも奴が、誰かと一緒だったらこの計画は中止することに決めていた。巻き添えにするわけにはいかないからだ。幸いなことに奴一人だけであった。やはり天は私に味方していてくれると思った。

私は誰にも怪しまれないように、合鍵で奴の車の助手席のドアを開けた。後部座席の下で何かが動いた気配がしたが確かめる余裕も無くダッシュボードの中に青大将を放し、ドアを閉めると大急ぎで自分の車に戻りアクセルを踏み込んだ。何度もシミュレーションを繰り返した成果なのか難なく事を済ますことが出来たが、車を走らせた瞬間から、膝の震えと寒気が私を襲った。音を立てて心臓と奥歯が鳴った。それでもためらうことなく、インターを出て、国道一号線を東へと走らせた。

由比を通り過ぎて暫く走り、コンビニエンスの駐車場に車を止め、公衆電話の受話器を取った私は、震える指先を凝視しながらプッシュボタンをゆっくりと押した。耳に押し当てた受話器の向こうからは何の応答も無く話し中になった。何度繰り返しても岡田純也の携帯は話し中にしかならなかった。折角の計画も失敗に終り、いつしか膝の震えも身体を襲った寒気や胸を突き抜くかのように鳴っていた心臓の音も止んでいた。

アパートに帰った私は、アジの開きを炙り、コップ酒に口を当てながら流れる涙を時折テッシュで拭いた。万が一の事を考え、わざわざ新幹線で名古屋まで出向き買い求めた青大将。車から足が付かないようにと三島でレンタカーを借る小細工までした。出来る限り

高速道路に設置されたNシステムに車が写されないようにと高速道路は富士インターから清水インターの一区間だけとし、公衆電話を使うほど用心を重ねたのに全てが水の泡と化したのだ。

百グラム千円以上の牛肉で祝酒との思いが、アジの開きとなってしまったことも流れる涙の一因かもしれない。私の人生は悲哀の人生なのだ。今までもそしてこれからも。

寂しさを紛らわすかのようにテレビのスイッチを入れた。夕方のニュースが流れた。私は手に持ったコップ酒を握りしめたまま自分の耳を疑った。紺色のスーツを着た女のニュースキャスターが、映し出された高速道路の事故現場の様子を解説していた。

「本日、午前十一時二十五分頃、東名高速道路下り線、清水インターチェンジを過ぎた一五七キロポスト付近の走行車線で乗用車が左側面に乗り上げ横転炎上するといった事故が発生致しました。運転していた岡田純也さんは即死の状態とのことです。静岡県警により、居眠り運転か脇見運転によるハンドル操作の誤りとの発表がなされました」

何が起きたのか私には判らなかった。私は奴が運転操作を誤って事故を起し、死ねば良いと思い計画したが、後一歩のところで電話は繋がらなかった。神が奴に天罰を加えたのか、事故が起きた時間からすると、私が電話をした時には既に奴は死んでいたことになる。

私は映し出されたテレビの画像を見て驚いた。現場検証をしている静岡県警高速隊員の足元を、二匹の青大将が高速道路左の草むらに逃げ込もうとしている様子が写っていた。

翌日の日曜日、私はスパーマーケットの開店を待って特上のステーキと赤ワインを買った。

これで、懸賞小説のラスト二十枚が埋まった。私はパソコンの画面を送りながら、もう一度頭から読み直しを行い、プリンターのマークをクイックした。毎度のことながら、折角の印刷物ではあるが見直す都度、誤字や脱字の多いことに呆れ、苦笑いをしてしまう。原稿に赤鉛筆で細かな箇所にまで手直しを入れた。最終確認を終え、時計を見ると既に夜中の一時を回っていた。

小説の中とはいえ、岡田純也を葬ることで私の心の隅に仕舞い込んだ黒い汚点をも葬ることが出来た思いがした。これからの私の人生に疑似愛の章を語る男が表れても騙されることはない。男を求めるだけの雌猫になることも止めようと思っている。岡田純也と何処かで偶然擦れ違うことがあっても動じることはない。「元気？」と言って擦れ違うだけである。それ以上の会話をすることもなければ振り返ることもない。

「明日からは、新しい愛を見つけるぞ」

小さく呟きながら封筒の表書きを終え床に着いた。

爽やかな目覚めと共に朝を迎えた。私はいつものようにトースターに食パンを二枚入れ、マグカップに注いだ牛乳にスプーン一杯の砂糖を入れて電子レンジのスイッチを押し、鏡に向かった。どういう訳か今日は化粧の乗りが良い。少し厚目かとは思ったが、私を引き戻してくれた上司に笑顔を見せたいと三十分以上かけて念入りに化粧を済ませた。薄くルージュも引いた。おかげですっかり冷めた食パンとミルクの朝食となってしまった。

今日は、懸賞小説の最終締め切り日である。私は昼休みを利用して郵便局に駆け込むことにした。

了

応募添付用紙

応募部門：第８回銀華文学賞応募作品

作品タイトル：疑似愛の章

原稿用紙換算枚数：５０枚

本名：　川瀬　進一

＊ふりがな：かわせしんいち

ペンネーム：成平一平太

＊ペンネームふりがな：なりひらいちへいた

年齢：５９才

生年月日：　１９５１年　１２月　２４日

郵便番号：２５０―０１１７

住所：神奈川県南足柄市塚原　２８８２　の　７

電話：０４６５　―　７４　―　８１５０

職業：会社員

略歴：特になし